

琉球大学学術リポジトリ

文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説：
バスク人とウチナーンチュの言語文化をめぐる社会空間の形成

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 文化共有集団, 越境的ネットワーク, バスクと沖縄, 言語文化, 国際比較研究 キーワード (En): Ethnic Group, Transnational network, Okinawa and Basque, language and Culture, International Comparative Study 作成者: 金城, 宏幸, Kinjo, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010084

文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説 ——バスク人とウチナンチュの言語文化をめぐる社会空間の形成——

金城 宏幸

- I. バスク人とウチナンチュの比較という射程
- II. 二つの文化共有集団における共通性
- III. 国境を越えたネットワークへの意欲
- IV. 二つの文化共有集団における相違点
- V. 沖縄がバスクの歴史的経験を範とすべきもの
- VI. 今後の課題と展望（まとめ）

キーワード：文化共有集団，越境的ネットワーク，バスクと沖縄，言語文化，国際比較研究

I. バスク人とウチナンチュの比較という射程

スペインの社会言語的状況に関心を持ちつつウチナンチュの越境的ネットワーク活動を参与観察してきた筆者は、昨今の沖縄における地域の自己決定権への関心の高まりや、「オール沖縄¹⁾」という呼びかけなどと並行するように言語復興への人々の関心を連日のようにメディアなどで目にするにつれ、バスクと沖縄という共通性について考えることが多くなっていた。そして2地域の比較研究の有意性と可能性を漠然と予感しつつバスク人に関する文献を読み進めるうちに、実に稀有な共通性を知ることになる。

琉球大学の移民研究チームは、長年ウチナンチュの移民に関する研究に取り組んできたが、ここ数十年はその越境的ネットワーク活動に着目し、特に世界的にもユニークなイベントとして1990年にスタートした「世界のウチナンチュ大会²⁾」の周辺に展開される活動の分析に努めてきた。世界広しとは言え、国内の一地方である沖縄県が主催し、世界に散在する沖縄系コミュニティーを繋いで国境を越えた社会空間を形成するような「大会」は他に例がないだろうと想定していたのであるが、バスク人も同様な「ハイアルディ Jaialdi³⁾（国際バスク文化フェスティバル）」を開催しており、しかも同じく5年毎で、同じような内容の行事やイベントを、ほぼ同時期にスタートさせていたのである。しかも、その原点がウチナンチュの“ユイマール⁴⁾（相互扶助）”に相当するバスク人の“アウゾラン auzolan⁵⁾”であり、今や世界に散在するディアスポラを連結する紐帯が、古くからバスク地方に伝わる言語 euskara⁶⁾（バスク語）だというのである。

我々は、この二つの集団が持つさらなる共通点と、当然ながら相違点を分析することにより、文化共有集団の越境的ネットワーク活動のより普遍的な様態が明らかになり、グロー

バル時代における人々の移動や繋がり、さらには国境を越えた社会空間の形成にあらたな視角を導入する可能性がある」と確信し、両集団への多言語意識調査とフィールドワークを通じた参与観察を行いながら研究に取り組んできた。本稿は、この比較研究の着想と出発点の基本情報を整理し、今後の視座を確認するための序説である。

Ⅱ. 二つの文化共有集団における共通性

日本におけるバスク地域研究の碩学、渡辺哲郎によると、「真のバスク人は、家の原点を示すバスクの苗字を持ち、バスク語を話し、アメリカに親戚がいること」という格言が今でも語られているという（渡部 2012 89）。「バスク」を「沖縄」に置き換えれば、そのままウチナンチュに対応しそうな格言である。こうした観点に立つと、バスク人とウチナンチュという集団には酷似した部分のあることが分かる。そこで、この二つの文化共有集団の類似性、とりわけ在外コミュニティ出現の経緯と現在の様態、昨今の越境的ネットワーク活動をめぐる活動とホームランドとの連帯における「言語」へのこだわりということを軸にもう少し詳しく比較観察すると、概ね次のように整理できるだろう。

・外洋に雄飛した先駆的な人々の誇り

バスク人は古くから捕鯨技術と操船術に優れており、7世紀以前からおこなわれていたビスケー湾での操業が次第に大西洋の遠洋捕鯨に移ると、16世紀初頭には、アイスランドやカナダのニューファンドランド島沿岸まで航海したことが知られている。バスク人の先駆的な勇敢さが語られる歴史である。

一方、琉球では13世紀ごろから中国商人を相手に交易を行っていたことが史実として確認されているが、「15～16世紀にかけて、琉球王国はアジアの貿易拠点としての地位を確立し、外部との貿易で得た経済力をエネルギー源として、内政面の充実、とくに国家機能の整備を図っていく」（高良 2000 29）。琉球文化と称される社会文化的事象の輪郭が形成されていった時期でもある。

・バスクの民主的な自治体制と琉球王国の歴史

バスク地方では、過去にバスク文化圏全体が一つの主権国家を形成したことはないが、15世紀から17世紀にかけて法典化されたスペイン語でフエロス *fueros*⁷⁾ と称される地方特権を有した時代には、その法的枠組みの中で政治的かつ経済・財政的な自由裁量を享受していた。

一方で、15世紀初頭に統一王朝が出現してから19世紀末のいわゆる琉球処分⁸⁾による日本国への併合まで、琉球は王国として独自の外交や交易を行ってきた。琉球王国は、琉米修好条約（1854年）や琉仏修好条約（1855年）、琉蘭修好条約（1859年）などで国際法の主体として認められていた。

・海外移民という社会現象または産業

バスク人、ウチナンチュともに多くの海外移民を送り出してきたことが知られており、移民の歴史を通して海外にコミュニティを形成し、「県人会」や「バスクの家」を設立し維持・継承してきた。後で述べるように、伝統的な家督相続に与らない者は海外移民にその活路を求めたという背景も共通しており、そうした人々の海の彼方における苦難の労働と送金が、ホームランドの経済にとって極めて重要な時期があったことも双方に共通している。海外においては、それぞれ他のスペイン人あるいは日本人の組織にも参加する一方で、その言語文化的な差異から、国単位のコミュニティとは趣を異にした組織を形成してきた。

・共同作業の伝統とコミュニティ形成の精神的基盤

冒頭で述べたように、バスク人には歴史的に“アウソラン”，ウチナンチュには“ユイマール”という相互扶助精神のもとで集団の目的を達成し、生活の質を向上させる慣習が浸透しており、周辺の隣人との共同作業が重視されてきた伝統が、ホームランドを離れた海外のコミュニティにおいても精神的基盤として機能しつつ、結束と連帯意識を育んできた。

・コミュニティ形成の核としての言語

バスク人の自称である *euskaldun* とは“バスク語を話す人”の意であり、バスク地方をさす *Euskal Herria* とは“バスク語の話されるくに”という意味であることは極めて象徴的である。ウチナンチュも自分たちと他者を識別する文化的要素としてその言語を重視してきた。また、バスク語あるいは琉球語のどちらにおいても方言の分化が著しいことも共通している。

海の向こうにおいても、ホスト社会の人々とは言うまでもなく、同じスペイン人や日本人とも言語文化的な差異の大きさから、言語の使用はすなわち「ウチ」と「ソト」の境界を際立たせ、結果として構成員の結束がおのずと強固なものとなっていった。

・家と慣習、屋号の存在について

バスクと沖縄には、近年まで世代を超えて一族が同居する伝統があり、一子（特に沖縄の場合は長男）相続制を通して家族・同族意識と祖先崇拜が保持されてきた。山バスクの典型的な農家の家屋はバスク語で「バシェリ *baserri*」、スペイン語で「カセリオ」と称され、そこに居住する人々や所有地の核であって屋号を持つ。沖縄では「門中」という家系の相続慣習が同族の輪の中心になっており、それが発展して同郷意識を強化する原点にもなっている。現代ではやや希薄になりつつあるが、どちらの地域においても近年まで人々は屋号によってその出自や所属が分かるようになっており、海外においてもそうした血縁・地縁ネットワークの延長線上にコミュニティが形成されていった側面が多く見られる。

・信仰による精神世界の共有

おそらく日本で歴史上最も有名なスペイン人であるフランシスコ・ザビエルや、イエズス会の創設者として知られるイグナティウス・デ・ロヨラがバスク人であったことに象徴されるように、中世の時代からバスク人はスペインの中でも敬虔なカトリック信者が多いことで知られている。

沖縄では、中国文化の影響も受けた地域独特の祖先崇拜の伝統が古代から受け継がれており、海外の移民先においても多くの人々が位牌を祀りその伝統を実践してきた。こうした信仰心は、両文化共有集団において、人々の精神世界の共有という側面をもたらした。

・近代国民国家体制における言語文化的な非差別体験

近代スペインにおいて、第3次カルリスタ戦争⁹⁾に「敗北」したバスク地方は、1876年7月21日法によりフェロス体制が停止され、マドリッドからの中央集権の波が押し寄せる。その後スペイン内戦(1936～39)におけるフランコ側の勝利による軍事独裁政権の樹立は、バスクの言語文化に対する弾圧が強化されることになり、バスク人の間に危機感が増大する。

沖縄の場合も、近代日本の明治政府以降に推進される国家統合のための同化政策の下、1879年の琉球処分により首里城が明け渡されて事実上琉球王国が滅び「沖縄県」となるが、伝統的な価値観や生活様式の「日本化」の進行と並行してウチナーンチュの間に独自の言語文化への思考が覚醒される。

このように、それぞれの国民国家体制に組み込まれている過程で、二つの文化共有集団は国内における文化的マイノリティという立場と差別を余儀なくされ、近代国家内における社会文化的な体験が他の地域とは趣を異にした形で集団意識が形成される。

ちなみに、バスク地方(バスク自治州とナファロア自治州)のスペインにおける地理的面積の割合は約3.5%で(バスク自治州のみでは約1.4%)人口はスペイン全人口の6.5%(バスク自治州のみでは約5.1%)である。沖縄県の面積は日本全国の約0.6%であり、人口は総人口の約1.1%であることから、両集団がそれぞれ帰属する国の中で物理的に少数派であることは明白である。

こうした状況にもかかわらず、あるいは、そういう状況であるからこそ、自分たちの歴史に誇りを持つ人々は、図1に示されているように、プライドを持ち続けることで文化共有集団として主流派に抗い、自らの言語文化を擁護しながら民族性を今日まで保持してきたのである。

・戦争被害の記憶と平和への希求

バスク人は近代国民国家スペイン、特にフランコ軍事独裁体制の下で民衆の言語の使用

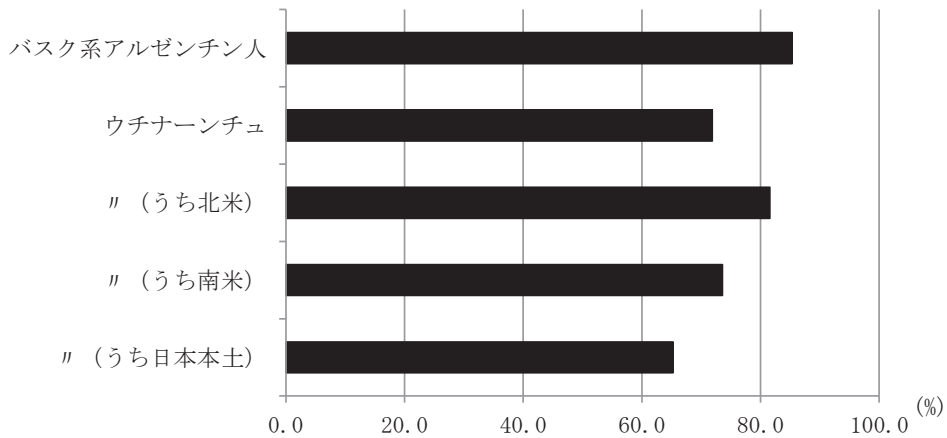


図1 バスク系またはウチナンチュであることを誇りに思う
(とてもそう思うと回答した比率)

資料：ウチナンチュ意識調査（2011）およびアルゼンチンでのアンケート調査をもとに作成。

や文化的表現の自由を制限された歴史を持ち、ウチナンチュも明治政府による皇民化政策のもとに同様の経験をする。その延長線上にバスクにおいてはゲルニカの惨状があり、沖縄では太平洋戦争による壊滅的被害があった。現在、ゲルニカ市には「ゲルニカ平和博物館」があり、糸満市には「ひめゆり平和祈念資料館」が開設されている。これらは、展示を通して国内外から訪れる来館者に戦争の悲惨さを伝え、平和の大切さを後世に語り継ぐのが目的だが、それぞれの地域に生活する人々や、そこにルーツを持つ在外同胞にとっては、集団の戦災記憶の象徴としても存立している。

Ⅲ. 国境を越えたネットワークへの意欲

これまで述べたような集団の連帯意識と世界観の共有は、バスク人やウチナンチュの在外コミュニティ内で次世代に受け継がれるだけでなく、当然ながらホームランド（バスクまたは沖縄）との連続性も保持されてきたのであり、特に近年の情報通信技術や交通手段の発達と相まって、国境を越えた新たなネットワークの気運が高まっている。

このことは、バスク・ディアスポラの首都と呼ばれる米国アイダホ州の州都ボイジーで5年毎に行われる「ハイアルディ Jaialdi（国際バスク文化フェスティバル）」やバスク自治州政府の主導により4年毎に開催される「世界バスク系コミュニティ会議」、沖縄県の主催により同じく5年毎に開催される「世界のウチナンチュ大会」や在外ウチナンチュ・コミュニティの主導で数年毎に企画される「世界のウチナンチュ会議」などに表象さ

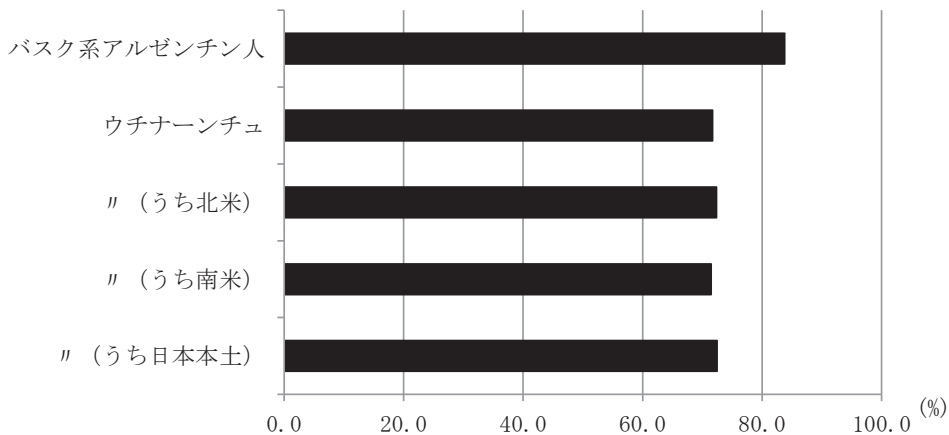


図2 バスクまたは沖縄の文化・芸能を誇りに思う
(とてもそう思うと回答した比率)

資料：ウチナーンチュ意識調査（2011）およびアルゼンチンでのアンケート調査をもとに作成。

れている。こうしたイベント以外にも、バスク人の多い米国やアルゼンチン、ウチナーンチュの多い米国やブラジルでは毎年のようにフェスティバルが開催されて大勢の参加者で盛り上がる。これらは、図2に見られるように、自他ともに認める独特の文化に強い愛着を持つ人々の、文字通り文化の祭典である。2015年のハイアルディの開催に当たり、バスク自治州首班¹⁰⁾ イニゴ・ウルクージュ・レントリアは下記のように祝辞を述べている。

バスク系アメリカ人のフェスティバルとして開催されたものが、今や国際的なイベントに成長し、アメリカ合衆国のみならず他の国々のバスク系コミュニティから何千もの人々が訪れるようになりました。

バスク農業従事者の“アウソラン（相互補助）”の伝統が協同組合¹¹⁾ という大きな産業を創出するまでに発展し、我々を世界でもユニークな存在にしているその原点が、ボイジーにおけるこのバスク文化祭の組織体制に見ることができます。これこそが我々のアイデンティティを継承していく鍵なのです。(Jaialdi 2015 Souvenir Book 8)

こうしたネットワーク活動は、在外コミュニティとホームランドとの絆の強化を中心に、在外コミュニティ間の交流を目的に推進されているが、2015年末現在、世界25か国に182のバスク自治州公認の「バスクの家」¹²⁾ があり、明確な公認制度によらないが、沖縄県は2015年末現在世界30か国に88の県人会を確認している。この在外同胞の拠点数や、2015年に筆者が参与観察した米国のハイアルディやアルゼンチンのバスク・フェスティバルの様子、6都市におけるバスクの家を訪問した印象では、二つの文化共有集団

の越境的ネットワークの様態は酷似している。在外コミュニティの中でそれぞれの同郷組織や親族ネットワークなどを基礎に築かれてきた相互扶助の心が、情報通信技術の発展とともに加速するグローバリゼーションの波の中で、ホームランドの政策的イニシアティブと共鳴して越境的なネットワークとなっていく現象も類似している。

越境的ネットワーク活動の象徴的イベントとしての「国際バスク・フェスティバル」と「世界のウチナーンチュ大会」で行われるイベントの内容や参加者の様子もほぼ同様と言える。おそらく、明確なアイデンティティーを持って昨今のこうした越境的ネットワーク活動を意識し積極的に参加する人々の数も、二つの集団の間に大きな差はないものと想定される。

IV. 二つの文化共有集団における相違点

これまで見てきたように、二つの文化共有集団は表象的には大きな類似性が見られるが、当然のことながら、その内面をより詳しく観察すると異なる事象が確認できる。その類似性には人間集団の普遍的な行動様式の輪郭が見て取れるかもしれないし、相違点にはそれぞれの人間集団の特性が浮かび上がってくることに、こうした比較研究の意義があろう。

それでは次に、二つの文化共有集団の相違点について、特に本稿の主題である在外コミュニティとホームランドの間で展開される越境的ネットワークと、時空を超えた連帯の核としての言語に関する両集団の取り組みを中心に確認してみよう。

・在外コミュニティの規模（バスク人とウチナーンチュ）

まず、在外バスク系人の数量に関して言えば、その総数をバスク自治州政府は約 500 万人と推定するが、すでにその検証は難しい。ただ、移民史の長さを考慮しても、沖縄県が 40 万人と推定する在外沖縄系の人々の数をはるかに凌ぐのは間違いない。操船技術に優れ、優秀な官僚と聖職者を輩出していたバスク人はカステーリャ王国に重用され、すでに 16 世紀にはスペイン帝国の海外植民事業やキリスト教の布教活動に多くのバスク人が海を渡った。確かに、「海外移民に新しい経済チャンスを求めて、バスクの一般住民や農民が大々的に加わるのは、19 世紀になってからであった」（渡部 2000 76）が、ウチナーンチュの場合はさらに 1 世紀ほど遅れて 20 世紀になってから集団での海外移民が始まっている。移民の歴史や経緯の違いによる両集団の在外コミュニティの規模の差異は歴然としている。

・世界的な著名人を輩出するバスク人

在外バスク人とウチナーンチュを比較するとき決定的な違いとして特筆されるのは、世界史におけるバスク系著名人の多さである。先述した聖職者のザビエルやロヨラはもとより、初の世界一周を達成した航海士エルカーノ、フィリピンを征服した武人レガスピ、ラテンアメリカ独立の父シモン・ボリバル、チリの大統領だったアジェンダやピノチェツ

ト、ノーベル文学賞のネルーダ、アルゼンチンのエビータことエバ・ペロンや革命家のチェ・ゲバラ、そして近年“世界で最も貧しい大統領”として日本でも話題のウルグアイのムヒカ元大統領など枚挙にいとまがない。

アルゼンチンはバスク人の移民先として米国と並んで重要な国であったが、バスク研究者の萩尾の次の指摘には驚かされる。

アルゼンチンの人口に占めるバスク系住民の比率は5～10%と見積もられるが、1853年から1943年までに誕生した22名のアルゼンチン大統領のうち、じつに10名がバスクの出自であった(萩尾2012 94)

カスティーリャ王国の発展を支えたバスク人は海外植民地でも要職に就き、同郷意識も作用して植民地での社会的地位の上昇はスペインの他地方の出身者よりも早かったといわれる。バスク系住民が同様に多い米国に比べて、アルゼンチンを中心とするラテンアメリカ諸国にこうした著名人が多く輩出したのは、言語的かつ時代的背景によるところが大きいと思われる。バスク人が大量に入植し始めたころには英語圏としてすでに国家形成されていた米国よりも、使用言語がスペイン語で帝国の延長線上に植民地が形成されていく過程にあったラテンアメリカでのバスク人の活躍が容易であったことは想像に難くない。移民史におけるこうした側面はウチナーンチュと大きく異なる点だといえよう。ウチナーンチュは、移民先においてバスク人よりも少数派であり、言語文化的にも2重のマイノリティー¹³⁾であった。

このように、移民という社会現象に数世紀もの長い歴史を有し、カスティーリャ官僚制において特権を保持して植民の最前線で活躍する者を含むバスク人に対し、ウチナーンチュの場合は移民史が1世紀を少し超える程度で、言語文化的にも2重のマイノリティーであったことは、それぞれの海外における社会活動の様態が異なる背景になっている。

同時に、二つの文化共有集団の相違点を述べる際に、ホームランドにおける近・現代の社会変化が在外コミュニティの様態に少なからぬ変化をもたらしている側面も確認できる。現代の越境的ネットワーク活動の動きは、これから述べるように、どちらの文化共有集団においても、ホームランド(バスク自治州もしくは沖縄県)の行政的方針と主導なしには活性化しなかった現象であるし、在外コミュニティ自体も政策に呼応する形で変容している。

・スペインの自治州制度とバスク在外同胞への政策的対応

バスク地方をさす Euskal Herria という空間領域については、バスクの人々の間でも認識に揺らぎがあるが、「七つは一つ」の標語に表されるように、20世紀のバスク・ナショナリズム運動の観点からはスペイン領の4県とフランス領の3地域を合わせた地理的範囲

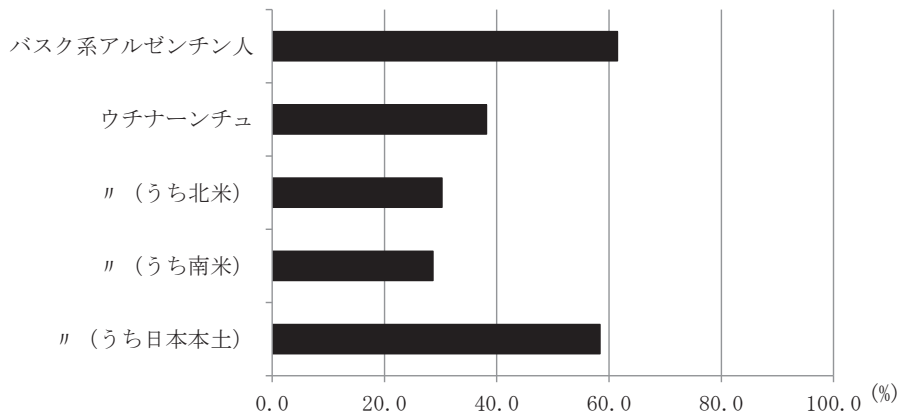


図3 バスク語またはウチナーグチに愛着がある
(とてもそう思うと回答した比率)

資料：ウチナーンチュ意識調査（2011）およびアルゼンチンでのアンケート調査をもとに作成。

である。スペインのビスカイア、ギブスコア、アラバの三つの県はスペイン新憲法（1978年発布）のもとで1979年に自治憲章を発布してバスク自治州となり、ナファアロア県は単独でナファアロア自治州となった。

この現代スペインの政治システムは中央集権の日本とは大きく違う点であるが、このことは文化共有集団としてのそれぞれの対外活動にも違いを生じさせている。まず、バスク自治州の憲章は「ゲルニカ憲章」とも呼ばれ、「バスク民族」という人間集団を初めて認知したのである。もちろん、沖縄県にはそのような自治制度も憲章も存在しない。さらに、バスク自治州は、1994年に「バスク自治州の外のバスク系コミュニティとの関係法」を発布し、国境を越えたバスク同胞との連帯強化の意思を明確にしている。

この法律は、「バスクの家」で実践されるバスク語文化の継承・発展を後援して、「バスク」に対する肯定的なイメージを世界に発信し、ETAに代表される否定的なイメージを転換することを旨とする（萩尾 2012 164）ものである。より具体的には、下記のような事業方針が明文化されている。

- ①「バスクの家」に対する財政支援
- ②若者をバスク自治州に招へいして将来のバスク系コミュニティのリーダーを育成する「ガスティムンドゥ事業」
- ③遠隔バスク語講座の開設とバスク語講師養成事業
- ④4年毎に開催される「世界バスク系コミュニティ会議」の開催

これらのうち③以外の同様の事業は沖縄県でも実施されているが、法制化されていないこともあり、事業の継続という意味ではやや明確性に欠ける。

・バスク語という孤立性と独自性

バスク人もウチナンチュも、自分たちと他者を識別する文化的要素としてその言語を重視してきたことを先に述べた。どちらも口承言語であったことや、方言の差異が大きいことも共通している。しかし、バスク人の自称である *euskaldun* が“バスク語を話す人”の意味であるということに象徴されるように、バスク人のバスク語に対する思い入れは、図3に示されているように、際立っている。バスク語 *euskara* はインド＝ヨーロッパ語族との親縁関係のない、いまだ起源不明な孤立した言語であることから、自己と他者を区別する決定的な要素としての独自性も極めて大きい。何といても、スペイン語との言語的差異は決定的である。その点は、独立した言語であるとはいえ、言語学的に日本語と同根の要素が多く確認されるウチナンチュの琉球語とは違いがある。

バスク民族運動の創始者サビーノ・アラーナも、「バスク語そのものが民族の伝統を継承する基本要因の一つとし、言語が民族的な要素を包括することに着目した」（渡部 2012 27）。アラーナは、自身も大人になってから始めたバスク語の習得に心血を注ぎ、最初の著作がバスク語文法に関するものであったが、外来語を排除して祖先から受け継いだ言語を純化し、文化を再構築することによりバスク人を覚醒しようとしたのである。

こうした言語の独自性や孤立性について、琉球語の個性や重要性を否定するものではなく、国家の主要言語や周辺諸語との関連性について、言語学者の田中克彦は次のように言及している。

700万人のカタロニア語よりは、人口においてずっと劣勢な80万人のバスク語の方が、はるかにその言語の固有性を維持する点で保障された地位にある。同様にわが国では、言語それ自体に則して言えば、アイヌ語の方が琉球語よりもはるかに保障されている。アイヌ語と日本語の絶対的は隔たりのために、たとえ望んだとしても、アイヌ語は日本語の方言にはなり得ない。ちょうど日本語が英語や中国語の方言にはなり得ないのと同様に。しかし琉球語は、単に琉球方言であるか、もしくは、そこへとたゆまなく転落する危険にさらされている。（田中 1997 159）

バスク地方を旅した司馬遼太郎は、その著作『街道をゆく』シリーズの中でバスク地方の印象を次のように述べている。

言語とは人間にとって何かということを考える上で、バスク国の場合ほど、いい例はない。さらには、人間とは何かということを考えることにおいてもである。（中略）

ともかくバスクには、バスク語以外、固有の文化は何一つない。あとは、フランスやスペインから借りてきた文化である。そのことは、バスク人はみな知っている。（司馬 2006 2）

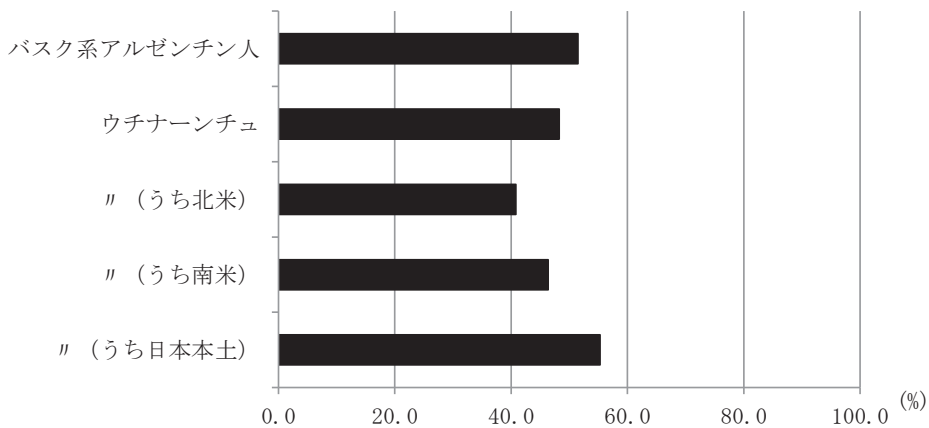


図4 バスク語またはウチナーグチを使えなくなることは、
バスクまたは沖縄の文化を失うことだと思う
(とてもそう思うと回答した比率)

資料：ウチナーンチュ意識調査（2011）およびアルゼンチンでのアンケート調査をもとに作成。

2015年に米国ボイジャーのハイアルディを参与観察した際にバスク研究者から聞いた話だが、過去の国際フェスティバル開会式の挨拶の際にスペイン語を使用してスピーチを行ったバスク自治州の代表は、聴衆から激しいブーイングを受け、這う這うの体で退散したことがあるという。バスク語こそがバスク文化とアイデンティティーの中核であり、バスク文化の祭典でバスク自治州の代表がバスク語を使用しないというのは言語道断ということであろう。

図4は、言語と文化の連続性に関する意識調査の結果であるが、言語の運用力があまりない人でも、文化の保持には言語が重要だと考えている様子が見える。

V. 沖縄がバスクの歴史的経験を範とすべきもの

このようにバスク人とウチナーンチュの越境的ネットワーク活動の共通性や相違点について概観してみると、双方の経験には互いに範とすべきものがあることが垣間見える。ここでは、移民活動から在外ディアスポラの形成まで歴史の長いバスク人やバスク自治州政府の経験から生み出されたいわゆるバスク・モデルに、ウチナーンチュあるいは沖縄県が学ぶべきものについて抽出してみたい。当然のことながら、バスク人の経験すべてが成功例でもなければ、そのままウチナーンチュに汎用できるというわけではないが、言語文化を中核にして越境的ネットワークのアイデンティティーを構築する方向性が共通しているのであれば、大いに参考になりうる部分があると思われる。

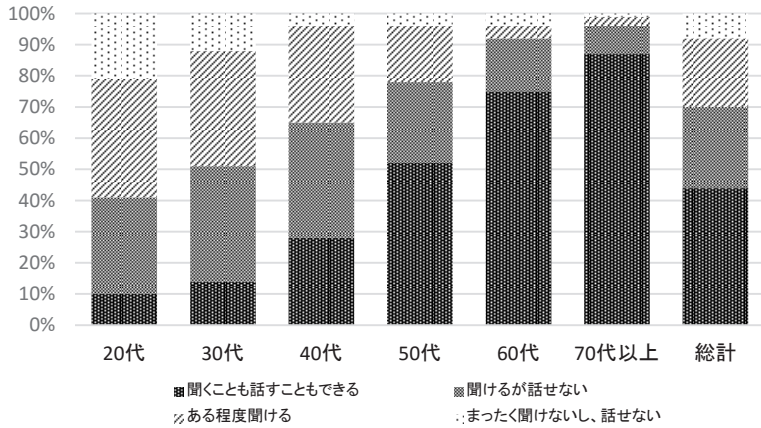


図5 沖縄県民の方言運用力

資料：琉球新報「沖縄県民意識調査2011」をもとに作成。

バスク自治州は自治州憲章を基に、在外バスク同胞との対応方針を定めた「バスク自治州の外のバスク系コミュニティとの関係法」を發布したことは先述した通りである。では、バスク人が連帯と結束を模索する際に文化的アイデンティティーの中核となるバスク語に関しては、いかなる模索や対処をしてきたのであろうか。

・バスク語アカデミーと統一バスク語の制定

1919年に創設されたバスク語アカデミーは、50年代から方言分化に関する議論を加速させ、1968年に統一（共通）バスク語 *euskara batua* を制定し、正書法の統一と合わせて、その普及を推進していく。19世紀から20世紀前半にかけてバスク地方、特にビルバオなどの都市部には工業化によるバスク人以外のスペイン人の流入が激増しており、政治状況とも合わせて、バスク文化が希釈しバスク語の保持が危機的状況になっていた。統一バスク語は、そうした逆境の中でバスク語（文化）の復権と民主化を目指したものである。同時にこれは、民族の血と宗教（カトリック）と並んで、バスク・ナショナリズムの創始者サビーノ・アラーナが重視した言語（バスク語）でもって新たなバスクの統合に向かう運動の流れを汲んだものであった。

ウチナンチュの琉球語は少数言語であり、現代の使用状況も決して良好とは言えず、方言分化が著しく消滅の危機に瀕していると指摘されるものがある。米軍基地などの問題を抱える政治状況とも相まって、昨今、地域の自己決定権への関心の高まりと並行するように言語復興への人々の模索が見られるが、方言の多様性を保存するという考えの方が主流で、一部の知識人が地域としての統一琉球語を制定する必要性を指摘している。沖縄人と

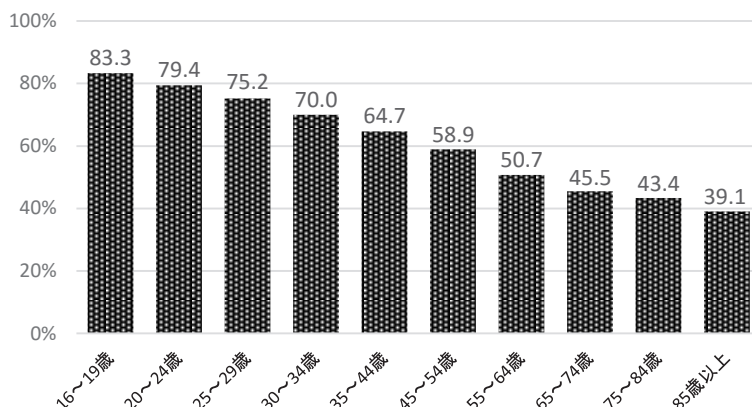


図6 自らの自治州の言語を読むことができる人口率、年代別（2001）

資料：セルバンテス協会研究情報センター、センサス 2001
 （スペイン語以外で独自の言語を持った自治州のみのデータ）をもとに作成。

してのアイデンティティーを自認する作家の佐藤 優¹⁴⁾は、「琉球語を回復するという動きを沖縄が示すことがとても大きな意味を持つ。それは、共通の歴史の記憶を呼び起こすからだ。」（『琉球新報』、2012年10月27日）と主張し、「沖縄の力を再確認するために、琉球語の正書法を確立する時期に至っていると思う。」（『琉球新報』、2011年10月15日）と呼びかける。

・バスク語使用正常化基本法の制定

1978年発布のスペイン現行憲法の第3条は、カスティーリャ語（スペイン語）を国家公用語と定めると同時に、スペイン各地に古くから使用されてきた固有の言語についても、自治州内の公用語となりうることを認めた。バスク自治州では、この憲法改正を受けて、1982年に「バスク語使用正常化基本法」を制定し、公的機関がとるべきバスク語普及の手段や方策を定めた。この基本法は行政やメディア、司法などのあらゆる分野に及ぶもので、教育現場（高等教育を除く）において下記のような教育言語に関するモデルを導入した。

モデルA：教育言語はスペイン語で、バスク語は必修科目として学ぶ

モデルB：バスク語とスペイン語を均等に使用するバイリンガル教育

モデルD：教育言語はバスク語で、スペイン語は必修科目として学ぶ

こうした教育制度の導入により、バスク語を使用できる人口は着実に増加しており、図5・6に示されているようにスペインでは2001年の時点で若者の8割がそれぞれの地方語¹⁵⁾（バスク語、カタルーニャ語、ガリシア語）を読めるとの調査結果が判明している。ウチナーンチュの場合に若年層ほど方言理解者が減少していくのとは逆に、スペインでは若者ほど

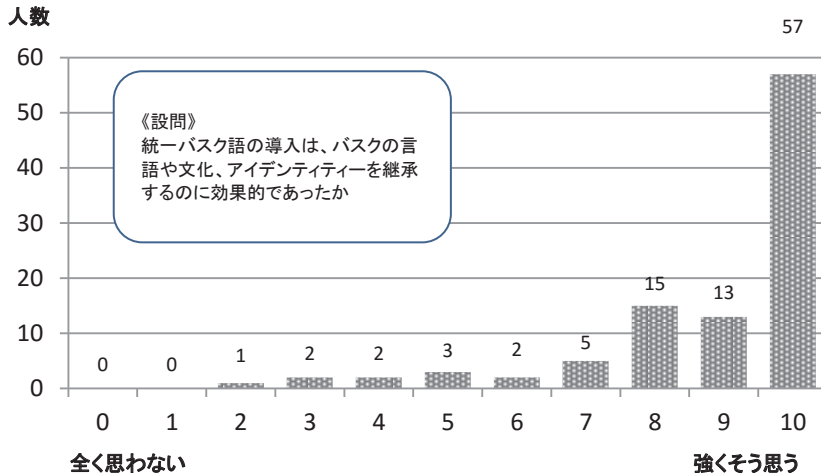


図7 統一バスク語導入がバスク文化の継承に与える影響

資料：アルゼンチンでの意識調査（2015）をもとに作成。

地方語の運用能力が高くなるのは、こうした学校教育の成果であることは明白であろう。

図7からは、バスクの言語文化やアイデンティティーの保持のために、統一バスク語の導入が有効であると考える人々が大多数であることが分かる。沖縄の言語復興を目指す場合に、方言の分化が著しい多数で多様な「しまくとぅば」が、いかに消滅の危機に晒されることなく維持・継承が可能か、その議論と方策の参考になろう。

・エチェパレ・インスティテュートの設立と活動

世界には、英国のブリティッシュ・カウンシル、ドイツのゲーテ・インスティテュートなどそれぞれの国の言語・文化の対外的な普及を目的とする公的機関が存在する。スペインの場合、国家のセルバンテス・インスティテュート以外に、バスク自治州が独自にエチェパレ・インスティテュートを開設してバスクの言語・文化に関して同様の活動を行っている。主な活動の目的として、①グローバル時代における近代的な言語としてのバスク語/文化の世界への普及、②高等教育機関におけるバスク語/文化研究の振興、③世界のバスク系コミュニティとの関係強化などが掲げられている。現在の具体的な活動としては、「15か国の34高等教育機関におけるバスク語/文化講座の開講（学生数2,089人）（数字はいずれも2012/13年度実績）、国際的な書籍市、映画祭、音楽祭、演劇祭などへのバスク文化人の派遣・参加、バスク（語）文学の翻訳出版助成、芸術活動の国外興業助成等」（萩尾2015 132）を行っている。世界の大学などの高等教育機関との協定を通して開設されるバスク語/文化講座は増加傾向にあり、今後ともその重要性が増している。

VI. 今後の課題と展望（まとめ）

本稿では、バスク人とウチナーンチュが実践する越境的ネットワーク活動について言語文化をめぐる論点を中心に比較し、その共通点と相違点を分析することにより、グローバル時代における人々の移動やネットワークについて普遍的な様態を明らかにしようと試みた。特に、一つの国家内で特色ある文化共有集団という自己/他者認識を持つ人々による、国境を越えた社会空間の形成という現象について、あらたな比較研究の視座を導入する研究のプラットフォームを提示すべく、その基本情報を分析し整理した。

バスク人とウチナーンチュという二つの人間集団は、今日までそれぞれ異なる歴史を歩み、異なる社会文化的特性を持つに至った。しかし、故郷の出移民から何世代も経た海外に在住する人々を同胞ととらえ、国境を越えた社会空間を形成しようとする試みには大きな類似点が見られる。そして、その連帯の基礎となるアイデンティティーの中核として「言語」を特に重視するという共通点がある一方で、それぞれの取り組みには明らかな相違点があり、互いに範とすべき点があることも明らかになった。

長い歴史と伝統を有するバスク地方は、グッゲンハイム美術館¹⁶⁾に表象されるように、大きな社会変貌を遂げたと言われる。かつて環境の悪化したビルバオ市街地に隣接した工場跡地に、今や超現代的な美術館が建ち、威容を誇っている。筆者にはこのことが、遙か古代から伝わる言語を話す古い民族が、集落間での方言差の大きさを克服して、統一（共通）バスク語を制定し、「民族の一体化」を歩み出した営為にも似ているように思われる。こうした言語政策に代表されるように、バスクには旧来の根源をかたくなまでに守りながら外の世界の新しいものを取り入れていくという伝統があるように見える。

バスク自治州の首班を10年間務め、今でもバスク人の間に信望が厚いイバレチュ¹⁷⁾は、バスク語が「アイデンティティーの明確な印であると同時に、統合と結束の要素である」（Ibarretxe 2015, 170）としながらも、「ルーツを忘れることなく未来に向かわなければならない」（同, 308）として、IT用語など現代のコミュニケーションに必要な新たな要素を吸収しながら民主的な手法で絶えず刷新し、バスク人社会の持続的発展に資するものでなければならないと啓蒙活動を展開する。

多様なバスク諸語から統一バスク語を編纂し、法律を制定して教育制度の中に組み入れ、人々の日常生活での使用頻度や運用能力が明らかに向上しているバスク自治州の現実には目を見張るものがある。ウチナーンチュも、そのアイデンティティーの基礎となる独自の言語（琉球語）の復興¹⁸⁾を本気で模索するのであれば、バスクの経験は大いに参考になるであろう。在外コミュニティとの国境を越えたネットワークの形成¹⁹⁾を図りつつ、沖縄県の特色ある振興策を模索する施策についても、バスク自治州における法整備は参考になり得る。

少なくとも、この論考を通して実感するのは、今後のウチナンチュ研究、とりわけ移民や越境的ネットワークに関する考察は、国際的に他の文化共有集団との比較を通してこそ深化させうる可能性があるということである。

付記

本論文を作成するに当たり、意識調査の配布と回収にご協力いただいた国内および海外各地の県人会役員の皆様をはじめ、ご回答いただきました多くのウチナンチュの皆様、そして比較研究を可能にいただいたバスク系アルゼンチン人の皆さまに心よりお礼と感謝を申し上げます。本稿は、平成27～29年度科学研究費補助金（基盤研究（C））、課題番号:15K03016）「沖縄県系移民の越境的ネットワークと意識・行動に関する地理学的研究」（研究代表者：町田宗博琉球大学教授）および2015（平成27）年度琉球大学中期計画達成プロジェクト（戦略的推進経費）「文化共有集団による越境的ネットワークの国際比較研究——ウチナンチュとバスク人をめぐって——」（研究代表者：金城宏幸琉球大学教授）に基づく研究成果の一部である。

注

- 1) 沖縄県知事の翁長雄志は、「イデオロギーよりはアイデンティティー」というスローガンを掲げ、米軍基地をめぐる政府との対峙の中で、県民の意思が一枚岩であることを示す時に使用する言葉。
- 2) 1972年の日本復帰後20周年という節目を数年後に控えて、沖縄県のあらたな振興策を模索し続ける県政の施策の延長線上に、移民一世の故郷への想いと二世・三世などのルーツ探しを熱望する声、そして沖縄県民の誇りと希望を将来に見出したいというベクトルが交差する形で、1990年（平成2）に開催され始めたウチナンチュの国際的な集会。その後、第5回大会（2011年）まで5年毎の開催を果たし、ウチナンチュの越境的な連帯を強化しつつ、その参加者も増加し続けている。今回は2016年10月に開催される。
- 3) フェスティバルの期間中、ボイジー市内複数の会場で、丸太切りや石担ぎ競争などの伝統的なバスク競技のパフォーマンスや、伝統舞踏、ベルチョラリなどが繰り広げられ、講演会やバスク・ディアスポラに関するシンポジウムなどが行われた。夕方になるとフェスティバル会場やバスク・ブロックでライブ音楽の演奏とともにバスク料理やワインが供されて、人々は夜更けまで祭りを楽しんだ。また、セント・ジョーンズ大聖堂では聖イグナティウスを祭るバスク語によるミサが執り行われた。
- 4) 相互扶助や助け合いを意味する琉球語。
- 5) バスク語で相互扶助や助け合い（特に山バスクにおける）を意味する。
- 6) 方言により *euskera* と *eskuara* ともいう。

- 7) 地方の慣習が法律と一体となって、王権への政治的な忠誠に対して、王から付与される政治的・経済的な地方特権。
- 8) 明治政府が1872年に琉球藩を設置し、1879年に武力的威圧のもとで廃藩置県を布達して首里城明け渡しを命じ、琉球王国が滅びて沖縄県となった出来事。
- 9) スペイン国王フェルナンド七世の死去によって起きた王位継承をめぐる対立と内戦。
- 10) バスク語で *Lehendakari*、スペイン語で *presidente* という。日本でいう知事に相当するが、自治州制度のスペインではより広い権限を有する。
- 11) バスク地方には、「カセリオ」を中心にした隣人たちとの共同作業の伝統が発展して巨大な企業グループになった「モンドラゴン協同組合」がある。
- 12) バスク系のコミュニティが所在国で法人格を獲得し、バスク自治州政府が規定する要件を満たせば「バスクの家」として公認する。
- 13) たとえば、20世紀初頭にアルゼンチンに移民したウチナンチュは現地のスペイン語をほとんど理解しないマイノリティーであり、さらに日系社会の中では琉球語を母語とする言語文化的マイノリティーであった。
- 14) 元外務事務官で、母親が沖縄県久米島の出身。
- 15) ちなみにカタルーニャ自治州やガリシア自治州でも言語正常化法が導入されている。
- 16) フランク・ゲーリーの設計により1995年に開館した奇抜で巨大な建築物で、前衛的な作品を多く展示する。
- 17) 1999年から2009年までバスク自治州のレエンダカリ *Kehendakari*（首班）を務め、イバレチェ提案で知られる。
- 18) 沖縄県議会は2006年2月の定例県議会で、9月18日を「しまくとうば（島言葉）の日」と制定した。「しま」とは地域または共同体のこと。直訳すれば地域の言葉という意味で、広義には「ウチナーグチ（沖縄の言葉）」とも意味が重なる。
- 19) 第6回世界のウチナンチュ大会実行委員会は、2016年8月の実行委員会で10月30日を「世界のウチナンチュの日」と決めた。翁長雄志知事が大会のグランドフィナーレで制定を宣言する。

文献

Jaialdi 2015 committee. *Basque Festival Souvenir Book 2015*.

萩尾 生・吉田浩美編. 2012. 『現代バスクを知るための50章』, 明石書店

Ibarretxe, Juan Jose. 2015. *The Basque Experience*. Reno: University of Nevada.

Instituto Cervantes. 2011. *El Uso de las Lenguas en la Red*

佐藤 優. 「ウチナー評論」『琉球新報』2011年10月15日

佐藤 優. 「ウチナー評論」『琉球新報』2012年10月27日

高良倉吉. 2000. 『図解 琉球王国』, 河出書房新社

田中克彦. 1997. 『ことばと国家』, 岩波新書

渡部哲郎. 2012. 『バスクとバスク人』, 平凡社

司馬遼太郎. 2006. 『街道をゆく 22 南蛮のみち1』, 朝日新聞社

(きんじょう ひろゆき・琉球大学法文学部教授・言語社会学)

Introduction to Comparative Study on Ethnic Groups' Diasporas and Transnational Networks: Uchinanchu (Okinawans) and Basques

KINJO Hiroyuki

Professor (Sociology of Language and Culture)

Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus

Key words: Ethnic Group, Transnational network, Okinawa and Basque, language and Culture, International Comparative Study

Okinawans are longing to host the 6th *Worldwide Uchinanchu (Okinawan) Festival* which will take place in October 2016. Okinawa, known as one of the emigrant prefectures of Japan, has sent many fellow countrymen abroad over the past 100 years. It has been a social phenomenon in the 20th Century and, at present, we can see Okinawan communities and centers in many countries around the world like Brazil, the U.S., Peru, Argentina, the Philippines etc. The Festival is a very big and unique reunion of Uchinanchu in Okinawa and Uchinanchu overseas, gathered by tens of thousands of people. While doing our research in this field, we happened to learn about Basques outside Spain, and we were astonished at the fact that they are doing very similar things to Uchinanchu like *Jaialdi(International Basque Culture Festival)* started at almost same time, in 1987, and held also every five years like *Uchinanchu Festival*. Basques are also known as emigrant people and are minorities among Spaniards. They are also very keen about ethnic identity together with their own language.

In this paper, I discuss the amazing similarities and some differences between the two ethnic groups especially about their sociocultural backgrounds which, as a result, will show us not only the characteristics of Uchinanchu and Basques but also a universal paradigm of human migration and transnational networks in the 21st century.